

震災から5年

茨城大学と東日本大震災
学生インタビュー

「The 茨大生」



ショッピングモールも、映画館もない。本やCDも、コンビニでしか買えない小さな町。若者にとってはちょっと不便な町かもしれない。代わりに海的美しさがある。春には母校の桜が美しい。

盆休みには帰省した先輩や後輩と一緒に飯を食う。町の運動会で懸命に走るおっちゃんたち。子どもの頃みんな叱られ、可愛がられた。小さな町の、自然な風景が、みんな、大好きだ。思いは一緒。心寄せ合う町だった。

その町が、あの日から、「原発の町」と呼ばれるようになった。あれから、5年。片時も忘れることのない「地元」の双葉町の今を小野田明さんは、撮り続けてきた。

「常磐線一本で双葉まで帰れる」水戸を選び、「誰もいない家に帰る辛さ」に耐えられず、入学早々のゴールデンウィークには帰省した。「就職は、町役場に」と決め、憧れの「双葉の大人たち」とともに働くことを夢見ていた。

学生生活が始まり、わずか一年足らず。京都へ旅行し、土産を携えて双葉町へ帰る途中、静岡県の浜松付近で東日本大震災の一報を知る。父親からのメールで家族の安否はわかった。ところが、翌日、避難勧告が出され、家族は町を追われることに。

「役場で働く母は仕事とともに移動して、祖母は近所の人に中学校まで連れて行ってもらい、父は13日まで家に残り、北茨城の叔母のもとへ。みな、それぞれに避難して、埼玉で合流したときには、本当にほっとしました」――。

最初に一時帰宅が許されたのは、半年後の夏。バスで入り、小さな袋に「大事なものだけ」と言われ、通帳と写真を持ち帰った。2時間の滞在。夏の景色も、匂いも、何も変わらない。ただ散らかっているだけ。そして、人は、だれもいなかった地元での就職は断念した。原発や避難所の話題を避けるように、少しずつ双葉と距離を置き始めている一方で、「何か、やらなきゃ」という焦りは募る。留学しよう。両親に相談すると、「今しかできないかもしれないから、行ってきな



地元・被災地を撮り続けて5年。前に進む故郷の姿を、町民たちへ。

人文科学研究科社会科学専攻 修士課程2年生 ● 小野田 明さん

2月14日(日)、人文学部講義棟で福島県双葉町の人びとへの取材をもとに制作したドキュメンタリー映画が上映された。

福島第一原子力発電所の事故の影響で、震災から5年経った今も全町避難の状態が続くなか、双葉町の住民たち一人ひとりが故郷を見つめる。制作したのは小野田さん。双葉町の出身だ。



「復興」とか、「双葉」を、意識しなくなるのが、本当の復興なのかな。



よ」と背中を押してくれた。2012年4月、英国・ロンドンで小野田さんの留学生活が始まった。そこで福島を題材にした演劇に出会う。

「エジンバラ・フェスティバルという演劇祭でした。ボランティアに加わって、『これ、僕の地元のことなんですよ』と何気なくビールを配っていたら、年配の英国人が『お前の地元は、どうなっているんだ』『原発で福島はどんな状況なんだ』と、すごい勢いで訊ねてくるんですね。ところが、答えられない。双葉の今がわからなくて……」。

答えられないもどかしさを打ち払うように、福島、双葉の今を真剣に知りたくて、留学後すぐに地元の仲間と会ってインタビューを始めた。

「最初は、映画を作ろうとかじゃなくて、記録するって大事なんじゃないかと思って始めたんです。双葉の人に見てもらいたい、喜んでもらいたいという気持ちで」。

散り散りになった同級生や先輩後輩はじめ、町民を訪ねて双葉の話を聴いてまわった。動き出した双葉への思いは、ひとつの映像作品にまとめられた。

「ところが、一年ではぜんぜんわからなくて、双葉のこと。まだまだ時間がかかるし、もっと知りたい、何か形にしたいと思い、大学院に進学することに決めました」――。

院生活2年間の集大成として、小野田さんの作品はドキュメンタリー『ある町』として完成。学内では、この2月、修士課程修了に合わせて公開された。

「除染の光景など、今見ると辛いシーンもあります。震災直後は双葉を好きと思うことさえ悩む人たちがいたけど、今ははっきり、わかります。双葉じゃないと、だめなんだって。替えが効かないんだって」――。

春からは、地元のテレビ局での就職が決まっている。成人の年に見られなかった双葉の大好きな桜が、社会人となった25歳の青年の帰還を、つぼみ膨らませて待っている。



①2015年夏の双葉町海水浴場。双葉町も他の被災地と同様に、甚大な津波の被害があった。変わらない綺麗な双葉の海。多くの町民が双葉の誇りとして、大好きな場所としてこの海について語る。②春の町民グラウンド。双葉町でも春には桜が咲き、夏には緑が生い茂る。町の花でもある桜。一人ひとりに大好きな桜の木があり、たくさんの思い出がある。小野田さんのもっとも好きな桜は、町民グラウンドの桜だ。③2016年双葉町ダルマ市のワンシーン。5年ぶりにダルマ市に来た同級生。震災後、自分の原点として双葉町との関わりを考えるようになった。「変わらず小規模だけど、やっぱりアットホームというか、あー双葉だなと感じられるお祭りでした」④2016年双葉町ダルマ市のワンシーン。復興支援員として働く双葉町出身の女性。恒例の「大ダルマ引き」で多くの町民が震災以前のように綱を引く姿を見て、「双葉ではないけど、双葉を思い出せる。懐かしい風景が浮かんできました」⑤夏、小野田さんの自宅前。柳通りと呼ばれ、昔は道沿いに柳の木が並んでいたという。時の流れとともに町の景色も変わっていく。平凡な道でも、小野田さんたち町民にとっては大切な場所。いつの日か、道路の先にあるゲートがなくなる景色を見たいと望む。